令和4年度厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）
併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究
分担研究報告書

.「認知症者の併存疾患管理の手引き」作成のための文献検索・・・　骨折

分担研究者　　松原　全宏　東京大学大学院医学研究科　准教授

研究要旨
認知症者は大腿骨近位部骨折になりやすい。認知症の合併は大腿骨近位部骨折の生命予後も機能予後も悪化させる。

A. 研究目的
認知症と大腿骨近位部骨折の関係を解明する。

B. 研究方法
論文検索による既報の精査を行い、東京大学医学部附属病院大腿骨骨折ボードのデータ解析も行う。
（倫理面への配慮） 東大病院入院患者に対する観察研究に該当し、入院時に包括的な同意書も取得されており倫理上の問題はない。

C. 研究結果
認知症者は大腿骨近位部骨折になりやすい。認知症の合併は大腿骨近位部骨折の生命予後も機能予後も悪化させる。大腿骨近位部骨折受傷後に認知症になりやすい。などの報告があった。大腿骨骨折ボードでは認知症者の大腿骨近位部骨折で術後せん妄が見られた。

D. 考察
脆弱性骨折も認知症も高齢と関係がある。脆弱性骨折の中でも大腿骨近位部骨折は、生命予後も機能予後も悪化させることがしられているが、認知症の合併で、生命予後・機能予後ともさらに悪化する。認知症者は入院中にせん妄をおこしやすく、せん妄に対する多職種連携の有用性が報告されている。多職種連携である大腿骨近位部骨折ボードの、認知症者の大腿骨近位部骨折への有用性を今後評価していきたい。

E. 結論
認知症と大腿骨近位部骨折は関係する。介入により生命予後と機能予後が変化するかはさらなる研究が必要である。

G. 研究発表
1.　論文発表
2.　学会発表
無し

H. 知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む。）
1. 特許取得
無し
2. 実用新案登録
無し